

『クリスマス・キャロル』 岩波書店  
チャールズ・ディケンズ/著 脇 明子/訳

資本家と労働者階級の格差が広がる産業革命後のイギリス。けちで気難しいスクルージは、クリスマス前夜3人の幽霊によって、過去・現在・未来の世界へといざなわれ、孤独な少年時代や恋人との別れを追体験し、涙する。そして最後に見せられた未来は、あまりにも哀れな自分の姿だった。未来は変えられるのか…?

クリスマス・キャロル



作者は自らの生いたちから、貧しく不幸な人々に深い同情を示し、万人の幸せを願った。病気や悲しみは伝染しやすいが、楽しさや喜びもまた伝染し、人々に幸せをもたらすのではないか。不安が多いコロナ禍の今、読みたい名作である。